

村上春樹「あしか祭り」

・岡部・佐野・渡辺・楯谷・奈原・大藤・田中・本田

◎結末部分には、「ワッペンにはあしかの絵と『メタファー』としてのあしか」という文句が印刷されていた」とある。「あしか」があるいは「あしか祭り」が「メタファー」として登場しているとするれば何のメタファーなのか？

▼人間が何か動物等に擬せられて「メタファー」として登場することの機能は？(「かいごぶり」駄目になった王国)「1963/1982年のイパネマ娘二等」

▼代理表象を用いることの文学小説的機能、メタファーとシンボルの機能。(「チーズケーキのような形をした僕の貧乏」スバゲティの年に「普通のハンバーグステーキ」100%の女の子等)

- ・岡部
- ・佐野
- ・渡辺
- ・楯谷
- ・奈原
- ・大藤
- ・田中
- ・本田

・佐野・「モモ」の「灰色の男」

過去に作られた人間の**タイプ**⇒人を巻き込んで情報を吸い取られて行く、**システム**によって作られた人間であり、人間がシステムを作って行く。**人間の本性**の中にそれ(システムの拡大)を許すものがある。名刺が何のメタファーか？ 肩書⇒情報を読み取る。メタファー⇒**アイデンティティ**(あしか性)をそういうもの(システム)に求めてしまうこと⇒あしか性  
こういうタイプの人間がいる。セールスにかかわる人間はこういう言い方をする。

・渡辺・こういうタイプ⇒選挙前の政治家、地域の世話役のような気がする。選挙前の立候補者⇒下手に出ているが、実は高圧的、隠された本音(寄付金)と表向きの態度(下手に出ている)のズレ

・大藤・何を言ったらいいかよく分からない。こういうのあるよなあ。演説⇒読者がやるせない(生きるの嫌だという気持ち) 気持ち⇒修論の審査会⇒勉強不足なところがあつ、合格をお願いしたい⇒気持ちの二重性⇒いやだなあ⇒本当は困難で大丈夫ですか？と思いつつ表向きは飾りながら、メタメッセージを送る

今迄の作品(不思議さ)のズレとは異なり、**いやなずれ**「あしか」から来る印象。いやな感じ。  
人間の言葉には必ずメタメッセージを含むと思う。  
こんなに嫌な気持ちになったのはこの小説だけ。

メタメッセージを動かしようのない状況が嫌

・田中・アシカに象徴されるなんらかの**タイプ**の人間との接触を一つのテーマにしている。(名刺を媒介にして嫌なタイプの人間なら家に入れないが、僕はアシカを家に入れてお茶まで出している。)

○名刺を渡したアシカと尋ねて来たアシカは別人  
同じアシカならともかく、彼とは異なるアシカを家に入れている。セールストークを好意的に受け取っていないが、家に入れて何時間も相手にしてしまっているのは、アシカは好ましくないが受け入れざるを得ない。アシカ⇒そういうタイプの人間。

○僕が僕自身の対応を**自嘲**している。

○二千円の寄付の引き換えとしてのワッペン

・本田・アシカが人である、動物である。

あしかは自分を人間と思っている  
僕はアシカを動物と思っている

メタファーとしてのアシカ(シーライオン⇒海の王者)  
・非差別的的存在

・僕は見下している⇒誠実に対応していないがその自覚がない。僕自身は一般市民で、差別しないように丁寧に接しているが、「白人対アジア人」⇒相容れない人種差別は拭えないということを書きたい小説なのではないか  
溝の埋めようがない関係

・アシカはバカ丁寧な言葉づかいを  
・言葉の二重構造

・赤いセリカの持ち主と僕の関係  
・僕とアシカの関係⇒セリカと僕の相似形

・ナチュラルな差別  
・アジア人**蔑視**はどうにもならない

・アシカ⇒動物扱い⇒言葉が丁寧であるが、日本人が努力して手に入れた英語⇒

・大藤・僕にも差別的見下しがあるという指摘に納得。  
人種差別とまでは解らないが、相手を小ばかにした感じが流れている。タイプとしての差別のイメージ。

・田中・僕はアシカに親近性を抱いている。帰ってもらつていいあしかを何故受け入れたのかと思うと、差別という感じではない。

・佐野・過去の「青汁」のセールスマンを思い出した。  
いやらしい所が典型的に出ている。なぜだかいやだ。  
典型としての人物造形。誇張され、戯画化された人物。

○僕の語りがしめすメッセージの二重性。それをどう読者は価値づけるか。意味づけるか。

・渡辺・アシカは普通のおじさん⇒悪者ではない⇒自分との同類⇒見た目は悪く無い⇒能弁、弁が立つ、演説。  
・田中・アシカの演説の台詞を増やしている。僕がどう

思っているかがそこに現われている。僕は次にもアシカに名刺を渡すのか？ 今回の寄付を本当に深刻には受け止めていない。ワッペンの部分。  
アシカに象徴される人物像を僕はどう受け止めているか。大量に加筆している。

佐野 シンボル

## あしか祭り

村上春樹

61

あしかがやってきたのは午後一時だった。僕はちようど簡単な昼食を終えて煙草を二服しているところだった。家の中には僕しかいなかった。玄関のベルがカンコンと鳴り、僕がドアを開けると、そこにあしかが立っていた。たいてい特徴のあるあしかではない。ごく普通の、どこにでもいる、平凡なあしかだ。アルマーニのサングラスをかけているわけでもないし、ブルックス・ブラザーズのスリー・ピースを着ているわけでもない。彼はごく普通の服を着て、ごく普通の顔をしていた。でもそんなことを言いだせば、大抵のあしかは普通の顔をして、普通の服を着ている。そういう点では、あしかという動物は一昔前の人民服を着た中国人みたいに見えなくもない。

「はじめまして」とそのあしかは言った。「ひよっとしてお忙しいところをお邪魔したのでなければよろしいのですが」

「ん、いや、べつにとくにその忙しいというわけじゃないんだけど」と僕は慌てて言った。べつに慌てなくてはならない理由なんて何もない。僕はあしかに対して何の負い目もない。しかしあしかという動物を前にすると、僕は理由もなくとにかく慌ててしまうのだ。あるいはそこには何か潜在的な精神的要因があるのかもしれない。幼児期に何か大きなトラウマのようなものを、僕はあしかに関して負ったのかもしれない。でも何はともあれ、僕はあしかという種族に対してどうしてもごく普通に、あたりまえに対応する **62** ことができないのだ。

「まことに僭越なお願いかとも思うのですが、もしご迷惑でなければ、ほんの十分ばかり時間を頂けると大変有難いのですが」とそのあしかは丁寧な口調で言った。

「こういうお願いがあつかましいことは重々承知いたしております。しかしそこをなにとぞご理解いただいて、ご厚情を賜ることができますれば、わたしくしどもいたしましてはこれにまさる喜びはございません」

僕はこういう馬鹿丁寧なあしか的言辭もかなり苦手だった。聞いていると体がむずむずしてくるのだ。でもそれは正確には彼らの責任ではない。彼らはそういう言葉づかいをするようにずっと躰けられてきたのだ。そういうしゃべり方をよしてくれといっても、簡単に変えられるものではないのだ。僕は反射的に腕時計に目をやった。でも本当は時計を見る必要なんて何もなかったのだ。僕には今日一日用事なんてものは全然なかったし、手持ちぶさたできつきからずと時計ばかり見ていたくらいなのだ。

「本当にそれほどお時間はとらせません」とあしかは物静かにつけくわえた。

そういう人の心をみすかすような物の言い方も苦手だった。でも僕はそのあしかにうまく門前払いをくわせることができなかった。悪いけれどもうすぐ来客がある

のでまた今度にしてほしいだとか、今ちようど電話をかけているところなのでか言っておあしかを体よく追い払うことだってできたのだ。でも僕にはそれができなかった。あしかが相手となると、僕はどういいうわけか言いたいことも言えなくなってしまうのだ。何がなんだかよくわからないままに僕はあしかを部屋に通し、グラスに冷えた麦茶を入れて出した。

「いや、どうぞお構いなく」とあしかは言った。「まことに恐縮のいたりです。本当にすぐに失礼いたしますので」

僕は力なく肯いた。

「でもまあ朝晩は幾分過ごしやすいうで」

「まあ、やはり九月ですからね」

「でもなんですねえ、高校野球も終わってしまったし、プロ野球も巨人の優勝は決まっちゃったようなもんだし、何かこうもうひとつ盛りあがりませんですねえ。」

もう少し阪神が頑張ってくればセリーグも面白くなるんですがね。やはり村山、江夏が二人で投げていたころは面白かったですよ。野球もなんだかこう小ぶりになってまいりますよね」

「うん、たしかにね」と僕は言った。でも本当のことを言えば、僕は野球になんて全然興味がないのだ。

しかしそんなことを口に出すわけにはいかない。どういいうわけかあしかというのはみんな野球が大好きなのだ。そして野球は彼らにとっては非常に重要な話題のひとつである。野球なしにあしかの会話というのは成立しない。彼らは野球のことを本当に詳しく知っている。誰の打率がどれくらいで、どのピッチャーの年収がいくらか、そういうことにやたら詳しいのだ。もし僕が野球に興味がないなんていつたら、あしかはすごく混乱してしまふに違いない。あるいはひどく傷つけられたように感じるかもしれない。

あしかはわけしり顔にふんふんと肯いてから部屋をぐるりと見回した。「失礼ですが、お一人でお暮らして？」

「いや、家内がしばらく一人で旅行に出ているもんですから」僕はそういつてから、余計なことを口にしてしまったことを後悔した。でももう遅かった。あしかはなるほどという顔をして何度か肯いた。

「ほうほう、御夫婦でべつべつに休暇と、それはなかなかよろしいですなあ。まあご夫婦と申ししても、ひとりひとりの人間でありますから、そう、なんと申しますか、自由を尊ぶというのも大事なことで **64** す。それは本当にそうでございますよ。自由と信頼があればこそ、本当の人間関係が結べるものです」

あしかはそう言つてまた意味ありげな顔つきで何度か肯いた。

(一行空け)

そう、要するに、全ては僕の責任なのだ。たとえどんなに酔っ払っていても、新宿のバーで隣りに座ったあしかに名刺なんて渡すべきではなかったのだ。それはごく単純に、やってはならないことなのだ。誰だってそんなことは知ってる。だから誰も——気の利いた人間なら——あしかに名刺を渡したりはしない。

誤解されるととても困るのだけれど、僕は決してあしかという動物を個人的に嫌っているわけではない。それどころかあしかにはなにかしら憎めないところがある。とさえ考えている。もちろん僕に妹がいて、ある日突然あしかと結婚するなんて言い出したらそれは少し面喰いはするだろうし、もう一度よく考えてみたらと忠告くらいはするかもしれないけれど、かといって猛烈に反対するようなことはないと思う。まあ愛しあっているんならいいじゃないか、結局はそういうことになると思う。その程度のものだ。

しかしあしかの手に渡った名刺となると、これはまた別問題である。僕はあしかに名刺を渡したおかげでずいぶん面倒な目にあつた人を何人も知っているし、僕自身それに近い経験をしたこともある。御存じのように、あしかにとつて名刺というのは非常に重要な意味を持っている。彼らはある種の鳥がビー玉を集めるように、懸命に名刺を集めるのである。

そして彼らはそこに何かしら宗教的といつてもいいような、特別な価値を見出すのである。それがいったいどういう種類の価値で、それがどういう風に彼らの役に立っているのか、そんなことは僕にはわからない。誰にもわからない。あしかにしかわからない。でもあしかたちは名刺という一枚の紙きれの中から65 実にいろんな意味を抽出するのだ。あなたが一枚の名刺を彼らに渡したとする。すると彼らはそこからあなたに関するあらゆる事実を学びとる——と彼らは信じ、また主張する。そんなことは馬鹿げてる僕には個人的には思う。そもそも一枚の紙きれから人格なんてものがわかるわけがないのだ。でもあしかたちはそうは思わない。名刺交換というのは、あしかたちにとってはものすごく重要な儀式なのだ。

(一行空け)

「私の友人が過日御名刺をいただきましたそうで」とあしかは言った。

「あ、そうですか？」と僕はとぼけた。「ずいぶん酔ってたからよく覚えてないんですよ」

「でも本人はとても喜んでおりましたですよ」

「で、まあ、このように突然おうかがいいたしましたしお願いというのも誠に心苦しいのですが、これも名刺のとりもつなにかの縁ということ……」

「お願い？」

「ええ、たいしたことじゃないんです。まあいわばあしかという存在に対する先生の象徴的御援助を頂ければ、という程度のことなんです」

あしかという動物は相手のことをたいてい先生と呼ぶ。

僕はあしかに先生と呼ばれるたびにすごく嫌な気持ちになる。でも先生と呼ばないでくれとはどうしても言えない。さっきも言ったように、あしかの前になると、僕は言いたいことがうまく言えなくなってしまうのである。

「象徴的援助？」と僕は聞き返した。

「申し遅れました」と言つてあしかは鞆の中から「そこそと名刺をとりだし、すごく大事そうに僕にさしだした。」

66

「こういうものでございます」

「あしか祭り実行委員長」と僕は肩書きを読みあげた。

「あしか祭りについてはお聞きおよびかとも思うのですが……」

「ええ、それはまあ」と僕は言った。「話だけはかねがね」

「あしか祭りは文字通りあしかの祭りであります。しかしそうは申しませんが、ただあしかが集まって賑やかに祭りをすればいいという時代は終わつたと申し上げてよろしいかと存じます。時代はそのような独善的かつ自己充足的なサークルの帰結を容認いたしてはおりません。輪は閉じられてはならないのです。そうでございますよ。祭りとは、人と人がヒューマンに触れ合うものなのでございます。内にはなく外に外にと開いていくべきものなのです。つまりこの伝統あるイヴェントをただ単にあしかのためだけのものではなく、もつと普遍的な、もつとユニヴァーサルなものに敷衍したいというのがわたくしどもの基本的な趣旨なのでございます」

「まあ」

「祭りというものはあくまで祭りにすぎません。そうでございます。華やかではありませんが、それはいわば連続した行為のひとつの帰結でしかないのです。真の意味は、つまり我々のアイデンティティーとしてのあしか性を確認する作業はこの行為の連続性の中にこそあるのです。祭りとはあくまでその追認行為にすぎないわけです」

「ツイニコウイ？」

「要するにです、つまり、世界におけるあしかという存在は、今日におきましてはあるいは微小な意味しか持たないかもしれません。そうでございます。あしかであることが今この現実の世界の中で明確な何を意味するでありましょうか？ 所詮あしかでございます。所詮あしかでございます。しかし——」67 かしびす「あしかはそこで効果的に言葉を切つて灰皿の中でくすぶっているハイライトをぎゅつともみ消した。「しかし世界というものは現実としてあしかを含んで存在しておるのです。そうでございます。たしかにあしかにはかつての勢いはないかもしれませんが、お若い方々にはその栄光の日々を御理解いただけないかもしれません。そうでございます。しかしあしかには、あしかにしか背負えないものを背負っているという自負がございます。それは先生にも御理解いただけると……」

「いや、そのお話は……」

「あああ、申しわけございません。つい気持がはやるば

かりにつまらぬことを申し上げて」とあしかは言った。

「つまりわたくしが真に申し上げたいことはでございますね、愛でございます。そうでございますしよ。愛なくして、理解はございません。理解なくして愛はございません。わたくしどもはそのようなグローバルな愛を育みたいのでございます。そうです。我々の目指しておりますのは、愛によって支えられた光輝あるあしかルネサンスです。あしかがあしかであるという、その事実によって、それをもう一度確認することによって、わたくしどもはまことに再生するのです。あしかであることは善でもございませぬ。悪でもございませぬ。栄光でもございませぬ。恥辱でもございませぬ。あしかはあしかであるという事実を踏まえることによって、真のあしかとなるのでございます。そうでございますよ。そしてそれはあしかにとつてのルネサンスであると同時に、世界にとつてもルネサンスであらねばならぬのです。だからこそ我々は、これまでは極度に閉鎖的でありましたあしか祭りを根本的に変革し、世界に向けてのメッセージ、あるいはそのステップボードとしてのあしか祭りにしたいと思っておるのでございます」

「お話はよくわかりました」と僕は言った。「それで具体的に……」

「壮大なデジャ・ヴュです」とあしかは天井を見上げるようにして言った。「申しますれば、いつか見た夢でございますよ。そうでございます、夢と申しますものはいつか見たことがあればこそ、力を持ちうる **88** ではないでしようか」

僕はなんだかよくわからないまま肯いた。典型的なあしかレトリックだ。あしかはいつもこういつたしやべり方をする。とにかくあしかにはしやべりたいだけしやべらせるに限る。べつに連中に悪気があるというわけではなく、ただしやべりたいというだけのことなのだ。

(一行空け)

結局あしかがしやべり終わったのは二時半を少し過ぎた頃で、僕はもうぐったりと疲れ果てていた。

「簡単に申し述べますれば、かくかような次第なのでございます」と言っておは平然となまぬるくなつてしまった麦茶を飲み干した。「甚だ簡便な御説明で誠に心苦しいのでありますが、おおよそのところはおわかりいただけましたでしょうか？」

「要するに寄附を集めていらつしやるんでしようか」と僕は思い切つて尋ねてみた。

「いえいえ減相もない。そういうことを申し上げておるのではございません」とあしかはにこやかに言った。

「しかしでございますね、もちろん先生にあくまで自然の御発露として御賛同いただき、またいくらかなりとも物質的な援助をいただけますれば、全国のあしかの励みになることは間違いないと僭越ながら愚考いたす次第であります……」

僕は財布から千円札を二枚出してあしかの前に置いた。

「少なくて悪いけれど、今これしかないんです。朝から保険料と新聞料金払っちゃったから」

「いえいえ」とあしかは顔の前でわざとらしくはたはたと手を振った。

「そんなことはおつしやらないでございます。そんなことをおつしやられると、手前などはもう穴があつたらもうなんでもいいから奥の奥までもぐりこみたいような気持ちでございます。本当でございますよ。我々といたしましては、よし、あしかをひとつ応援してやろうという先生の温かいお気持だけでもう何より嬉しいのでございます。いえい **89** えこれは金額の問題なんかではございません。減相もございません」

\*

あしかが帰つたあとには「あしか会報」という薄い機関誌とあしかワツペンが残されていた。ワツペンにはあしかの絵と「メタファーとしてのあしか」という文句が印刷されていた。僕はそのワツペンの処置に困つて、ちやうど近所に違反駐車していた赤いセリカの前フロント・ガラスのまんまに貼りつけておいた。すごく強力なワツペンだったから、はがすのに苦労したんじゃないかと思つた。



## あしか祭り

村上春樹

61

あしかがやってきたのは午後一時だった。僕はちようど簡単な昼食を終えて煙草を二服しているところだった。家の中には僕しかいなかった。玄関のベルがカンコンと鳴り、僕がドアを開けると、そこにあしかが立っていた。たいして特徴のあるあしかではない。ごく普通の、どこにでもいる、平凡なあしかだ。アルマーニのサングラスをかけているわけでもないし、ブルックス・ブラザーズのスリー・ピースを着ているわけでもない。彼はごく普通の服を着て、ごく普通の顔をしている。でもそんなことを言いだせば、大抵のあしかは普通の顔をして、普通の服を着ている。そういう点では、あしかという動物は一昔前の人民服を着た中国人みたいに見えなくもない。

「はじめまして」とそのあしかは言った。「ひよつとしてお忙しいところをお邪魔したのでなければよろしいのですが」

「ん、いや、べつにとくにその忙しいというわけじゃないんだけど」と僕は慌てて言った。べつに慌てなくてはならない理由なんて何もない。僕はあしかに対して何の負い目もない。しかしあしかという動物を前にすると、僕は理由もなくとにかく慌ててしまうのだ。あるいはそこには何か潜在的な精神的要因があるのかもしれない。幼児期に何か大きなトラウマのようなものを、僕はあしかに関して負ったのかもしれない。でも何はともあれ、僕はあしかという種族に対してどうしてもごく普通に、あたりまえに対応する **62** ことができないのだ。

「まことに僭越なお願いかとも思うのですが、もしご迷惑でなければ、ほんの十分ばかり時間を頂けると大変有難いのですが」とそのあしかは丁寧な口調で言った。

「こういうお願いがあつかましいことは重々承知いたしております。しかしそこをなにとぞご理解いただいて、ご厚情を賜ることができずれば、わたしくしどもいたしましてはこれにまさる喜びはございません」

僕はこういう馬鹿丁寧なあしか的言辞もかなり苦手だった。聞いていると体がむずむずしてくるのだ。でもそれは正確には彼らの責任ではない。彼らはそういう言葉づかいをするようにずっと躰けられてきたのだ。そういうしゃべり方をよしてくれといっても、簡単に変えられるものではないのだ。僕は反射的に腕時計に目をやった。でも本当は時計を見る必要なんて何もなかったのだ。僕には今日一日用事なんてものは全然なかったし、手持ちぶさたできつきからずっと時計ばかり見ていたくらいなのだ。

「本当にそれほどお時間はとらせません」とあしかは物静かにつけくわえた。

そういう人の心をみすかすような物の言い方も苦手だった。でも僕はそのあしかにうまく門前払いをくわせることができなかった。悪いけれどももうすぐ来客がある

## あしか祭り

村上春樹

63

あしかがやってきたのは午後一時だった。僕はちようど簡単な昼食を終えて煙草を二服しているところだった。玄関のベルがカンコンと鳴り、僕がドアを開けると、そこにあしかが立っていた。たいして特徴のあるあしかではない。ごく普通の、どこにでもいる、平凡なあしかだ。サングラスをかけているわけでもないし、ブルックス・ブラザーズのスリー・ピースを着ているわけでもない。

あしかという動物はどちらかという和一昔前の中国人みたいに見える。

「はじめまして」とそのあしかは言った。「お忙しいところをお邪魔したのでなければよろしいのですが」

「ん、いや、べつに忙しいというわけじゃないんです」と僕は慌てて言った。あしかにはどことなく無防備なところがあって、それが僕を必要以上に慌てさせるのだ。いつでもそうなのだ。いつでも——どんなあしかでも。

「もしよろしければ、十分ばかり時間を頂けると大変有難いのですが」

僕は反射的に腕時計に目をやった。でも本当は時計を見る必要なんて何もな **64** かったのだ。

「それほどお時間はとらせませんので」とあしかは僕の心をみすかしたように丁寧につけくわえた。

のでまた今度にしてほしいだとか、今ちようど電話をかけているところなのでか言ってあしかを体よく追い払うことだってできたのだ。でも僕にはそれができなかった。あしかが相手となると、僕はどういわけか言いたいことも言えなくなってしまうのだ。何がなんだかよくわからないままに僕はあしかを部屋に通し、グラスに冷えた麦茶を入れて出した。

「いや、どうぞお構いなく」とあしかは言った。「まことに恐縮のいたりです。本当にすぐに失礼いたしますので」

そう言いながらもあしかは美味そうに麦茶を半分ばかり飲み、ポケットからハイライトをひっぱりだし、ライターで火を点けた。「いやしかし、暑い日が続きますですね」

僕は力なく肯いた。

「でもまあ朝晩は幾分過ぎしやすいうで」

「まあ、やはり九月ですからね」

「でもなんですねえ、高校野球も終わってしまいましたし、プロ野球も巨人の優勝は決まっちゃったようなもんだし、何かこうもうひとつ盛りあがりませんですね。もう少し阪神が頑張ってくればリーグも面白くなるんですがね。やはり村山、江夏が二人で投げているところは面白かったですよ。野球もなんだかこう小ぶりになってまいりますよね」

「うん、たしかにね」と僕は言った。でも本当のことを言えば、僕は野球になんて全然興味がないのだ。

しかしそんなことを口に出すわけにはいかない。どういわけかあしかというのはみんな野球が大好きなのだ。そして野球は彼らにとっては非常に重要な話題のひとつである。野球なしにあしかの会話というのは成立しない。彼らは野球のことを本当に詳しく知っている。誰の打率がどれくらいで、どのピッチャーの年収がいくらか、そういうことにやたら詳しいのだ。もし僕が野球に興味がないなんていったら、あしかはすごく混乱してまうに違いない。あるいはひどく傷つけられたように感じるかもしれない。

あしかはわけしり顔にふんふんと肯いてから部屋をぐるりと見回した。「失礼ですが、お一人でお暮らして？」

「いや、家内がしばらく一人で旅行に出ているもんですから」僕はそういつてから、余計なことを口にしてしまったことを後悔した。でももう遅かった。あしかはなるほどという顔をして何度か肯いた。

「ほうほう、御夫婦でべつべつに休暇と、それはなかなかよろしいですね。まあご夫婦と申ししても、ひとりひとりの人間でありますから、そう、なんと申しますか、自由を尊ぶというのも大事なことで64す。それは本当にそうでございますよ。自由と信頼があればこそ、本当の人間関係が結べるものです」

あしかはそう言ってまた意味ありげな顔つきで何度か肯いた。

そう、要するに、全ては僕の責任なのだ。たとえば

僕は何がなんだかよくわからないままにあしかを部屋に通し、グラスに冷えた麦茶を入れて出した。

「いや、どうぞお構いなく」とあしかは言った。「すぐに失礼致しますから」

それでもあしかは美味そうに麦茶を半分ばかり飲み、ポケットからハイライトをひっぱり出してライターで火を点けた。「暑い日が続きますねえ」

「そうですね」

「でもまあ朝晩は幾分過ぎしやすいうで」

「ええ、やはり九月ですから」

「でもなんですねえ、高校野球も終わっちゃったし、プロ野球も巨人の優勝は決まっちゃったようなもんだし、何かこうもうひとつ盛りあがりませんねえ」

「うん、それはそうですね」

あしかはわけしり顔にふんふんと肯いてから部屋をぐるりと見回した。「失礼ですが、ずっとお一人ですか？」

「いや、家内がしばらく旅行に出ているもんですから」65

「ほうほう、御夫婦でべつべつに休暇と、それはなかなかよろしいですね」

あしかはそう言ってクックツと楽しそうに笑った。  
(1行空け)

んなに酔っ払っていても、新宿のバーで隣りに座ったあしかに名刺なんて渡すべきではなかったのだ。それはごく単純に、やっではならないことなのだ。誰だってそんなことは知ってる。だから誰も——気の利いた人間なら——あしかに名刺を渡したりはしない。

誤解されるととても困るのだけれど、僕は決してあしかという動物を個人的に嫌っているわけではない。それどころかあしかにはなにかしら憎めないところがある。ときえ考えている。もちろん僕に妹がいて、ある日突然あしかと結婚するなんて言い出したらそれは少し面喰いはするだろうし、もう一度よく考えてみたらと忠告くらいはするかもしれないけれど、かといって猛烈に反対するようなことはないと思う。まあ愛しあっているんならいいじゃないか、結局はそういうことになると思う。その程度のものだ。

しかしあしかの手に渡った名刺となると、これはまた別問題である。僕はあしかに名刺を渡したおかげでずいぶん面倒な目にあつた人を何人も知っているし、僕自身それに近い経験をしたこともある。御存じのように、あしかにとって名刺というのは非常に重要な意味を持っている。彼らはある種の鳥がビー玉を集めるように、懸命に名刺を集めるのである。

そして彼らはそこに何かしら宗教的といつてもいいような、特別な価値を見出すのである。それがいったいどういう種類の価値で、それがどういう風に彼らの役に立っているのか、そんなことは僕にはわからない。誰にもわからない。あしかにしかわからない。でもあしかたちは名刺という一枚の紙きれの中から65 実にいろんな意味を抽出するのだ。あなたが一枚の名刺を彼らに渡したとする。すると彼らはそこからあなたに関するあらゆる事実を学びとる——と彼らは信じ、また主張する。そんなことは馬鹿げると僕は個人的には思う。そもそも一枚の紙きれから人格なんてものがわかるわけがないのだ。でもあしかたちはそうは思わない。名刺交換というのは、あしかたちにとってはものすごく重要な儀式なのだ。

「私の友人が過日御名刺をいただきましたそうで」とあしかは言った。

「あ、そうですか？」と僕はとぼけた。「ずいぶん酔ってたからよく覚えてないんですよ」

「でも本人はとても喜んでおりましたですよ」

「で、まあ、このように突然おうかがいいたしましたお願いというのにも誠に心苦しいのですが、これも名刺のとりもつなにかの縁ということ……」

「お願い？」

「ええ、たいしたことじゃないんです。まあいわばあしかという存在に対する先生の象徴的御援助を頂ければ、という程度のことなんです」

あしかという動物は相手のことをたいてい先生と呼ぶ。僕はあしかに先生と呼ばれるたびにすごく嫌な気持ちになる。でも先生と呼ばないでくれとはどうしても言えない。

要するに、全ては僕の責任なのだ。たとえどんなに酔っ払っていても、新宿のバーで隣りに座ったあしかに名刺なんて渡すべきではなかったのだ。誰だってそんなことは知ってる。だから誰も——気の利いた人間なら——あしかに名刺を渡したりはしない。

誤解されるととても困るのだけれど、僕は決してあしかという動物を嫌っているわけではない。それどころかあしかにはなにかしら憎めないところがある、ときえ考えている。もちろん僕に妹がいて、ある日突然あしかと結婚するなんて言い出したらそれは少し面喰いはするだろうけれど、かといって猛烈に反対するといふほどでもない。まあ愛しあっているんならいいじゃないか、結局はそういうことになると思う。その程度のものだ。

しかしあしかの手に渡った名刺となると、これはまた別問題である。御存じのように、あしかという動物は広大な象徴性の海の中に生きている。AはBの象徴であり、BはCの象徴であり、Cは総体としてのAとBの象徴である、といった具合だ。あしかのコミュニティはこのような象徴性のピラミッド、あ66 るいはカオスの上に成立している。そしてその頂点、あるいは中心に位置するのが名刺なのである。

だからあしかの鞆の中にはいつもぶ厚い名刺ホルダーが入っていて、その厚さがあしかのコミュニティの中の地位を象徴するのである。ある種の鳥がビーズ玉を収集するのと同じことだ。

「私の友人が先日御名刺を頂きましたそうで」とあしかは言った。

「うん、あ、そうですか」と僕はとぼけた。「ずいぶん酔ってたからよく覚えてないんですよ」

「でも本人はとても喜んでおりましたですよ」

「で、まあ、このように突然おうかがい致しましてお願いというのにも誠に心苦しいのですが、これも名刺のとりもつなにかの縁ということ……」

「お願い？」

「ええ、たいしたことじゃないんです。まあいわばあしかという存在に対する先生の象徴的御援助を頂ければ、という程度のことなんです」

あしかという動物は相手のことをたいてい先生と呼ぶ。68

さつきも言ったように、あしかの前にとると、僕は言いたいことがうまく言えなくなってしまうのである。

「象徴的援助？」と僕は聞き返した。

「申し遅れました」と言つてあしかは鞆の中から「ごそ」と名刺をとりだし、**すごく大事**そうに僕にさしだした。

66

「こういうものでございます」

「あしか祭り実行委員長」と僕は肩書きを読みあげた。

「あしか祭りについてはお聞きおよびかとも思うのですが……」

「ええ、それはまあ」と僕は言った。「話だけはかねがね」

「あしか祭りは文字通りあしかの祭りであります。しかしそうは申しませんが、ただあしかが集まって賑やかに祭りをすればいいという時代は終わったと申し上げてよろしいかと存じます。時代はそのような独善的かつ自己充足的なサークルの帰結を容認いたしてはおりません。輪は閉じられてはならないのです。そうでございますよ。祭りとは、人と人がヒューマンに触れ合うものなのでございます。内にはなく外に外にと開いていくべきものなのです。つまりこの伝統あるイヴェントをただ単にあしかのためだけのものではなく、もつと普遍的な、もつとユニヴァーサルなものに敷衍したいというのがわたくしどもの基本的な趣旨なのでございます」

「はあ」

「祭りというものはあくまで祭りにすぎません。そうでございます。華やかではありませんが、それはいわば連続した行為のひとつの帰結でしかないので。真の意味は、つまり我々のアイデンティティーとしてのあしか性を確認する作業はこの行為の連続性の中にこそあるのです。祭りとはあくまでその追認行為にすぎないわけです」

「ツイニコウイ？」

「要するにです、つまり、世界におけるあしかという存在は、今日におきましてはあるいは微小な意味しか持たないかもしれません。そうでございます。あしかであることが今この現実の世界の中で明確な何を意味するでしょうか？ 所詮あしかでございます。所詮あしかでございます。しかし——し67かしです」あしかはそこで効果的に言葉を切つて灰皿の中でくすぶつてゐるハイライトをぎゅつともみ消した。「しかし世界というものは現実としてあしかを含んで存在しておるのです。そうでございます。たしかにあしかにはかつての勢いはないかもしれませんが。お若い方々にはその栄光の日々を御理解いただけないかもしれません。そうでございます。しかしあしかには、あしかにしか背負えないものを背負つてゐるという自負がございます。それは先生にも御理解いただける……」

「いや、そのお話は……」

「ああ、申しわけございません。つい気持がはやるばかりにつまらぬことを申し上げて」とあしかは言った。

「象徴的援助？」

「申し遅れました」と言つてあしかは鞆の中から「ごそ」と名刺を取り出し、僕に差し出した。

「こういうものでございます」

「あしか祭り実行委員長」と僕は肩書きを読みあげた。

「あしか祭りについてはお聞きおよびかとも思うのですが……」

「ええ、それはまあ」と僕は言った。「話だけはかねがね」

「あしか祭りはあしかにとっては極めて重大な、ある意味では象徴的なイヴェントなのです。いや、あしかのみならず世界にとつてと言い換えてもよろしいでしょう」

「はあ」

「つまり、あしかという存在は今日にあつては極めて微少な存在であると思われております」

しかし——しかしです」あしかはそこで効果的に言葉を切つて灰皿の中でくすぶつてゐるハイライトをぎゅつともみ消した。「しかしあしかは世界を構成する精神性のある種のファクターを確実に担つてゐるのです」

「いや、そのお話は……」

「つまりわたくしが真に申し上げたいことはでございますね、愛でございます。そうでございます。愛なくして、理解はございません。理解なくして愛はございません。わたくしどもはそのようなグローバルな愛を育みたいのでございます。そうです。我々の目指しておりますのは、愛によって支えられた光輝あるあしかルネサンスです。あしかがあしかであるという、その事実によって、それをもう一度確認することによって、わたくしどもはまことに再生するのです。あしかであることは善でもございません。悪でもございません。栄光でもございません。恥辱でもございません。あしかはあしかであるという事実を踏まえることによって、真のあしかとなるのでございます。そうでございますよ。そしてそれはあしかにとつてのルネサンスであると同時に、世界にとつてもルネサンスであらねばならぬのです。だからこそ我々は、これまでは極度に閉鎖的でありましたあしか祭りを根本的に変革し、世界に向けてのメッセー、あるいはそのステップボードとしてのあしか祭りにしたいと思っておるのでございます」

「お話はよくわかりました」と僕は言った。「それで具体的に……」

「壮大なデジャ・ヴュです」とあしかは天井を見上げるようにして言った。「申しますれば、いつか見た夢でございますよ。そうでございます、夢と申しますものはいつか見たことがあればこそ、力を持ちうる **68** ではないでしょうか」

僕はなんだかよくわからないまま肯いた。典型的なあしかレトリックだ。あしかはいつもこういったしやべり方をする。とにかくあしかにはしやべりたいだけしやべらせるに限る。べつに連中に悪気があるというわけではなく、ただしやべりたいというだけのことなのだ。

結局あしかがしやべり終わったのは二時半を少し過ぎた頃で、僕はもうぐったりと疲れ果てていた。

「簡単に申し述べますれば、かくかような次第なのでございます」と言っておしは平然となまぬるくなつてしまった麦茶を飲み干した。「甚だ簡便な御説明で誠に心苦しいのでありますが、おおよそのところはおわかりいただけましたでしょうか？」

「要するに寄附を集めていらつしやるんでしょうか」と僕は思い切って尋ねてみた。

「いえいえ減相もない。そういうことを申し上げておるのではございません」とあしかはにこやかに言った。「しかしでございますね、もちろん先生にあくまで自然の御発露として御賛同いただき、またいくらかなりとも物質的な援助をいただけますれば、全国のあしかの励みになることは間違いあるまいと僭越ながら愚考いたす次第であります……」

僕は財布から千円札を二枚出してあしかの前に置いた。

「少なくて悪いけれど、今これしかないんです。朝から保険料と新聞料金払っちゃったから」

「我々の目指しているのはあしかルネサンスです。それはあしかにとつてのル **69** ネサンスであると同時に、

世界にとつてもルネサンスであらねばならぬのです。だからこそ我々は、これまでは極度に閉鎖的でありましたあしか祭りを根本的に変革し、世界に向けてのメッセー、あるいはそのステップボードとしてのあしか祭りにしたいのです」

「お話はよくわかりました」と僕は言った。「それで具体的に……」

「祭りというものはあくまで祭りにすぎません。華やかではありますが、それはいわば連続した行為のひとつの帰結でしかないのです。真の意味は、つまり我々のアイデンティティーとしてのあしか性を確認する作業はこの行為の連続性の中にこそあるのです。祭りとはあくまでその追認行為にすぎないわけです」

「ツイニンコウイ？」

「壮大なデジャ・ヴュです」

僕はなんだかよくわからないまま肯いた。典型的なあしかレトリックだ。あしかはいつもこういったしやべり方をする。とにかくあしかにはしやべりたいだけしやべらせるに限る。べつに連中に悪気があるというわけではなく、ただしやべりたいというだけのことなのだ。

結局あしかがしやべり終わったのは二時半を少し過ぎた頃で、僕はもうぐったりと疲れ果てていた。

「ということですが」と言っておしは平然となまぬるくなつてしまった麦茶を飲み干した。

「大体のところはおわかり頂けましたでしょうか？」

「要するに寄附ですね」

「精神的御援助です」とあしかは訂正した。

僕は財布から千円札を二枚出してあしかの前に置いた。

「少なくて悪いけれど、今これしかないんです。朝から保険料と新聞料金払っちゃったから」

「いえいえ」とあしかは顔の前でわざとらしくはたはたと手を振った。

「そんなことはおっしゃらないでくださいまし。そんなことをおっしゃられると、手前などはもう穴があつたらもうなんでもいいから奥の奥までもぐりみたいような気持ちでございます。本当でございますよ。我々といましては、よし、あしかをひとつ応援してやろうという先生の温かいお気持だけでもう何より嬉しいのでございます。いえいえ **69** えこれは金額の問題なんかではございません。減相もございません」

\*

あしかが帰ったあとには「あしか会報」という薄い機関誌とあしかワッペンが残されていた。ワッペンにはあしかの絵と「メタファーとしてのあしか」という文句が印刷されていた。僕はそのワッペンの処置に困って、ちょうど近所に違反駐車していた赤いセリカのフロント・ガラスのまんなかには貼りつけておいた。すごく強力なワッペンだったから、はがすのに苦労したんじゃないかと思う。

「いえいえ」とあしかは顔の前で手を振った。

「本当にお気持だけでいいんです」

(一行空け)

あしかが帰ったあとには「あしか会報」という薄い機関誌とあしかワッペンが残されていた。ワッペンにはあしかの絵と「メタファーとしてのあしか」という文句が印刷されていた。僕はそのワッペンの処置に困って、ちょうど近所に違反駐車していた赤いセリカのフロント・ガラスのまんなかには貼りつけておいた。すごく強力なワッペンだったから、はがすのに苦労したんじゃないかと思う。

#### 〈表記のしかたについての説明〉

◎上段には【村上春樹全作品版 1991.1】テキストを、下段は【「トレフル」(講談社文庫版) 1982.3】テキストを配置した。

◎上段【村上春樹全作品版】の赤字部分は、【講談社版】にはなく、全作品版で付け加えられた部分である。

◎下段【講談社版】の赤字部分は、全作品版で変更、消去等される部分である。

◎上段【村上春樹全作品版】と下段【講談社文庫版】の傍線部分は、テキスト内の位置が大きく変更された部分である。

## あしか祭り

村上春樹

あしかがやってきたのは午後一時だった。

僕はちやうど簡単な昼食を終えて煙草を二服しているところだった。家の中には僕しかいなかった。玄関のベルがカンコンと鳴り、僕がドアを開けると、そこにあしかが立っていた。たいして特徴のあるあしかではない。ごく普通の、どこにでもいる、平凡なあしかだ。アルマーニのサングラスをかけているわけでもないし、ブルックス・ブラザーズのスリー・ピースを着ているわけでもない。彼はごく普通の服を着て、ごく普通の顔をしていた。でもそんなことを吾いだせば、大抵のあしかは普通の顔をして、普通の服を着ている。そういう点では、あしかという動物はどっちかといっても一昔前の人民服を着た中国人みたいに鬼木も見えなくもない。

「はじめまして」とそのあしかは言った。「ひよっとしてお忙しいところをお邪魔したのでなければよろしいのですが」

「ん、いや、べつにとくにその忙しいというわけじゃないんですんだけど」と僕は慌てて言った。あしかにはどことなく無防備なところがあつて、それが僕を必要以上に慌てさせるものだ。いつでもそあなのだ。いつでもどんなあしかでも。べつに慌てなくてはならない理由なんて何もない。僕はあしかに対して何の負い目もない。しかしあしかという動物を前にすると、僕は理由もなくとにかく慌ててしまうのだ。あるいはそこには何か潜在的な精神的要因があるのかもしれない。幼児期に何か大きなトラウマのようなものを、僕はあしかに関して負ったのかもしれない。でも何はともあれ、僕はあしかという種族に対してどうしてもごく普通に、あたりまえに対応する[32]ことができないのだ。

「まことに僭越なお願いかとも思うのですが、もしよわしければ、ご迷惑でなければ、ほんの十分ばかり時間を頂けると大変有難いのですが」とそのあしかは低調な口調で言った。「こういうお願いがあつかましいことは重々承知いたしております。しかしそこをなにとぞご理解いただいで、ご厚情を賜ることができますれば、わたしと子どもいたしましてはこれにまさる喜びはございません」

僕はこういう馬鹿丁寧なあしか的言辭もかなり苦手だった。聞いていると体がむずむずしてくるのだ。でもそれは正確には彼らの責任ではない。彼らはそういう言葉づかいをするようにずっと躰けられてきたのだ。そういうしゃべり方をよしてくれといつても、簡単に変えられるものではないのだ。僕は反射的に腕時計に目をやった。でも本当は時計を見る必要なんて何もなかったのだ。僕には今日一日用事なんてものは全然なかったし、手持ちぶさたできつきからずつと時計ばかり見ていたくらいなのだ。

「本当にそれほどお時間はとらせませんのわ」とあしか

は僕の心をみすかしたよりに十重に物静かにわけ加えたつけくわえた。

そういう人の心をみすかすような物の言い方も苦手だった。でも僕はそのあしかにうまく門前払いをくわせることができなかった。悪いけれどももうすぐ来客があるのでまた今度にしてはいいだとか、今ちやうど電話をかけているところなのでとか言つてあしかを体よく追い払うことだつてできたのだ。でも僕にはそれができなかった。あしかが相手となると、僕はどういふわけか言いたいことも言えなくなつてしまうのだ。僕は何がなんだかよくわからないままに僕はあしかを部屋に通し、グラスに冷えた麦茶を入れて出した。

「いや、どうぞお構いなく」とあしかは言った。「まことに恐縮のいたりです。本当にすぐに失礼致しますわいたしますので」

それでもそう言いながらもあしかは美味そうに麦茶を半分ばかり飲み、ポケットからハイライトをひっぱりだしてライターで火を点けた。「いやしかし、暑い日が続きますですね」

「そりですわね」

僕は力なく肯いた。

「でもまあ朝晩は幾分過ごしやすいうで」

「ええ、まあ、やはり九月ですからね」

「でもなんですわね、高校野球も終わつちやつたよなもんだし、何かこうもうひとつ盛りあがりませんですわね。もう少し阪神が頑張つてくれればセリーグも面白くなるんですがね。やはり村山、江夏が二人で投げたところは面白かつたですよ。野球もなんだかこう小ぶりになつてまいりますよね」

「わん、それはそりですわうん、たしかにね」と僕は言った。でも本当のことを言えば、僕は野球になんて全然興味がないのだ。

しかしそんなことを国に出すわけにはいかない。どういふわけかあしかというのはみんな野球が大好きなのだ。そして野球は彼らにとつては非常に重要な話題のひとつである。野球なしにあしかの会話というのは成立しない。彼らは野球のことを本当に詳しく知っている。誰の打率がどれくらいで、どのピッチャーの年収がいくらか、そういうことにやたら詳しいのだ。もし僕が野球に興味がないなんていつたら、あしかはすぐく混乱してしまうに違いない。あるいはひどく傷つけられたように感じるかもしれない。

あしかはわけしり顔にふんふんと肯いてから部屋をぐるりと見回した。「失礼ですが、ずつとお一人でお暮らして？」

「いや、家内がしばらく一人で旅行に出ているもんですから」僕はそういつてから、余計なことを口にしてしまったことを後悔した。でももう遅かつた。あしかはなるほどという顔をして何度か肯いた。

「ほうほう、御夫婦でべつべつに休暇と、それはなかなかよろしいですね。まあ、ご夫婦と申しまして、ひと

りひとりの人間でありますから、そう、なんと申しますか、自由を尊ぶというのも大事なことで

64

す。それは本当にそうでございますよ。自由と信頼があればこそ、

本当の人間関係が結べるものです」

あしかはそう言って「キリキリと楽しそり」に笑った。意味ありげな顔つきで何度か肯いた。

そう、要するに、全ては僕の責任なのだ。たとえどんなに酔っ払っていても、新宿のバーで隣りに座ったあしかに名刺なんて渡すべきではなかったのだ。それはごく単純に、やっつてはならないことなのだ。誰だってそんなことは知ってる。だから誰も——気の利いた人間なら——あしかに名刺を渡したりはしない。

誤解されるととても困るのだけれど、僕は決してあしかという動物を個人的に嫌っているわけではない。それどころかあしかにはなにかしら憎めないところがある。とさえ考えている。もちろん僕に妹がいて、ある日突然あしかと結婚するなんて言い出したらそれは少し面喰いはするだろうし、もう一度よく考えてみたらと忠告くらいはするかもしれないけれど、かといって猛烈に反対するといふほどでもないようなことではないと思う。まあ愛しあっているんならいいじゃないか、結局はそういうことになると思う。その程度のものだ。

しかしあしかの手に渡った名刺となると、これはまた別問題である。僕はあしかに名刺を渡したおかげでずいぶん面倒な目にあつた人を何人も知っているし、僕自身それに近い経験をしたこともある。御存じのように、あしかにとつて名刺というのは非常に重要な意味を持っている。と、いふ動物は広大な象徴性の海の中に生きています。AはBの象徴であり、BはCの象徴であり、Cは総体としてのAとBの象徴である、といった具合だ。あしかの「コミユニテイ」はこのような象徴性のピラミッド、あるいはカオスの上に成立している。そしてその頂点、あしかは中心に位置するのが名刺なのである。

だからあしかの鞆の中にはいつも数枚の名刺ホルダーが入っていて、その庫きがあしかの「コミユニテイ」の中核の地位を象徴するのである。彼らはある種の鳥がビーズを集めるのと同じことだ。懸念に名刺を集めるのである。

そして彼らはそこに何かしら宗教的といつてもいいような、特別な価値を見出すのである。それがいったいどういう種類の価値で、それがどういう風に彼らの役に立っているのか、そんなことは僕にはわからない。誰にもわからない。あしかにしかわからない。でもあしかたちは名刺という一枚の紙きれの中から

65

裏にいろんな意味を抽出するのだ。あなたが一枚の名刺を彼らに渡したとする。すると彼らはそこからあなたに関するあらゆる事実を学びとる——と彼らは信じ、また主張する。そんなことは馬鹿げると僕は個人的には思う。そもそも一枚の紙きれから人格なんてものがわかるわけがないのだ。でもあしかたちはそうは思わない。名刺交換というのは、あしかたちにとつてはものすごく重要な儀式なのだ。

「私の友人が先田過日御名刺をいただきましたそうで」とあしかは言った。

「あ、そうですね？」と僕はとぼけた。「ずいぶん酔つてたからよく覚えてないんですよ」

「でも本人はとても喜んでおりましたですよ」

僕は適当にごまかして麦茶を飲んだ

「で、まあ、このように突然おうかがい致しましていたしましてお願いというのも誠に心苦しいのですが、これも名刺のとりもつなにかの縁ということ……」

「お願い？」

「ええ、たいしたことじゃないんです。まあいわばあしかという存在に対する先生の象徴的御援助を頂ければ、という程度のことなんです」

あしかという動物は相手のことをたいてい先生と呼ぶ。僕はあしかに先生と呼ばれるたびにすごく嫌な気持ちになる。でも先生と呼ばないでくれとはどうしても言えない。さつきも言ったように、あしかの前になると、僕は言いたいことがうまく言えなくなってしまうのである。

「象徴的援助？」と僕は聞き返した。

「申し遅れました」と言つてあしかは鞆の中から「ごそこ」と名刺を取り出しとりだし、すごく大事そうに僕に差し出したさした。66

「こういうものでございます」

「あしか祭り実行委員長」と僕は肩書きを読みあげた。

「あしか祭りについてはお聞きおよびかとも思うのですが……」

「ええ、それはまあ」と僕は言った。「話だけはかねがね」

「あしか祭りはあしかにとつては極めて重大な、ある意味では象徴的なイベントなのです。いや、あしかのみならず世界にとつてと言い換えてもよろしいでしょう。文字通りあしかの祭りであります。しかしそうは申しませんが、ただあしかが集まって賑やかに祭りをすればいいという時代は終わったと申し上げてよろしいかと存じます。時代はそのような独善的かつ自己充足的なサークルの帰結を容認いたしてはおりません。輪は閉じられてはならないのです。そうでございます。祭りとは、人と人がヒューマンに触れ合うものなのでございます。内にはなく外に外にと開いていくべきものなのです。つまりこの伝統あるイベントをただ単にあしかのためだけのものではなく、もつと普遍的な、もつとユニヴァーサルなものに敷衍したいというのがわたくしどもの基本的な趣旨なのでございます」

「はあ」

「祭りというものはあくまで祭りにすぎません。そうでございます。華やかではありませんが、それはいわば連続した行為のひとつの帰結でしかないので。真の意味は、つまり我々のアイデンティティーとしてのあしか性を確認する作業はこの行為の連続性の中にこそあるのです。祭りとはあくまでその追認行為にすぎないわけ

す」

「ツイニニコウイ？」

「要するにです、つまり、世界におけるあしかという存在は、今日にあつては極めておきましては微小な存在であらふと思われております。あるいは微小な意味しか持たないかも知れません。そうでございます。あしかであることが今この現実の世界の中で明確な何を意味するでありましょうか？ 所詮あしかでございます。所詮あしかでしかございません。しかし——し[67]かしです」あしかはそこで効果的に言葉を切つて灰皿の中でくすぶつているハイライトをぎゅっともみ消した。しかしあしかは世界を構成する精神性のある種のファクターを確実に担つてゐるのです。しかし世界というものは現実としてあしかを含んで存在してゐるのです。そうでございますよ。たしかにあしかにはかつての勢いはないかも知れません。お若い方々にはその栄光の日々を御理解いただけないかも知れません。そうでございますよ。しかしあしかには、あしかにしか背負えないものを背負つてゐるという自負がございます。それは先生にも御理解いただけますと……」

「いや、そのお話は……」

「我々の申指してゐるのはあしかルネサンスです。それはあしかにとつてのルネサンスであると同時に、世界にとつてもルネサンスであらねばならぬのです。だからこそ我々は、これまでは極度に閉鎖的でありましたあしか祭りを根本的に変革し、世界に向けてのメッセージ、あるいはそのネチツプボードとしてのあしか祭りにしたいのです」

「お話はよくわかりました」と僕は言った。「それで具体的に……」

「ああ、申しわけございません。つい気持がはやるばかりにつまらぬことを申し上げて」とあしかは言った。

「つまりわたくしが真に申し上げたいことはでございますね、愛でございます。そうでございますよ。愛なくして、理解はございません。理解なくして愛はございません。わたくしどもはそのようなグローバルな愛を育みたいのでございます。そうです。我々の目指してありますのは、愛によつて支えられた光輝あるあしかルネサンスです。あしかがあしかであるという、その事実によつて、それをもう一度確認することによつて、わたくしどもはまことに再生するのです。あしかであることは善でもございませぬ。悪でもございませぬ。栄光でもございませぬ。恥辱でもございませぬ。あしかはあしかであるという事実を踏まえることによつて、真のあしかとなるのでございます。そうでございますよ。そしてそれはあしかにとつてのルネサンスであると同時に、世界にとつてもルネサンスであらねばならぬのです。だからこそ我々は、これまでは極度に閉鎖的でありましたあしか祭りを根本的に変革し、世界に向けてのメッセージ、あるいはそのステップボードとしてのあしか祭りになりたいと思つておるのでございます」と僕は言った。

「お話はよくわかりました」

「それで具体的に……」

「壮大なデジャ・ヴユです」とあしかは天井を見上げるようにして言った。「申しますれば、いつか見た夢でございますよ。そうでございます、夢と申しますものはいつか見たことがあればこそ、力を持ちうる[68]のではないでしようか」

僕はなんだかよくわからないまま肯いた。典型的なあしかレトリックだ。あしかはいつもこういつたしやべり方をする。とにかくあしかにはしやべりたいだけしやべらせるに限る。べつに連中に悪気があるというわけではなく、ただしやべりたいというだけのことなのだ。

結局あしかがしやべり終わったのは二時半を少し過ぎた頃で、僕はもうぐったりと疲れ果てていた。

「ということですが」と言つてあしかは平然となまぬるくなつてしまつた麦茶を飲み干した。

「本体のとこはおわかり頂けましたでしょうか？」

「簡単に申し述べますれば、かくかような次第なのでございます」と言つてあしかは平然となまぬるくなつてしまつた麦茶を飲み干した。「甚だ簡便な御説明で誠に心苦しいのでありますが、おおよそのところはおわかりいただけましたでしょうか？」

「要するに寄附ですおねを集めていらつしやるんでしようか」と僕は思い切つて尋ねてみた。

「精神的御援助です」とあしかは訂正した。

「いえいえ減相もない。そういうことを申し上げておるのではございません」とあしかはにこやかに言った。

「しかしでございますね、もちろん先生にあくまで自然の御発露として御賛同いただき、またいくらかなりとも物質的な援助をいただけますれば、全国のあしかの励みになることは間違いないと僭越ながら愚考いたす次第であります……」

僕は財布から千円札を二枚出してあしかの前に置いた。

「少なくとも悪いけれど、今これしかないんです。朝から保険料と新聞料金払つちやつたから」

「いえいえ」とあしかは顔の前でわざとらしくはたはたと手を振つた。

「本当にお氣持だけでいいんです」

「そんなことはおっしゃらないでくださいまし。そんなことをおっしゃられると、手前などはもう穴があつたらもうなんでもいいから奥の奥までもぐり二みたいような氣持でございます。本當でございますよ。我々といひましては、よし、あしかをひとつ応援してやろうという先生の温かいお氣持だけでもう何より嬉しいのでございます。いえいえこれは金額の問題なんかではございません。減相もございません」

\*

あしかが帰つたあとには「あしか会報」という薄い機関誌とあしかワツペンが残されていた。ワツペンにはあしかの絵と「メタファーとしてのあしか」という文句が印刷されていた。僕はそのワツペンの処置に困つて、ちよど近所に違反駐車していた赤いセリカの前フロント・

ガラスのまんなかには貼りつけておいた。すごく強力なワッペンだったから、はがすのに苦労したんじゃないかと思う。

## あしか祭り

村上春樹

あしかがやってきたのは午後一時だった。

僕はちようど簡単な昼食を終えて煙草を二服しているところだった。玄関のベルがカンコンと鳴り、僕がドアを開けると、そこにあしかが立っていた。たいして特徴のあるあしかではない。ごく普通の、どこにでもいる、平凡なあしかだ。サングラスをかけているわけでもないし、ブルックス・ブラザーズのスリー・ピースを着ているわけでもない。あしかという動物はどちらかというところ、一昔前の中国人みたいに見える。

「はじめまして」とそのあしかは言った。「お忙しいところをお邪魔したのでなければよろしいのですが」

「ん、いや、べつに忙しいというわけじゃないんです」と僕は慌てて言った。あしかにはどこことなく無防備なところがあって、それが僕を必要以上に慌てさせるのだ。

いつでもそうなのだ。いつでも——どんなあしかでも、もしよろしければ、十分ばかり時間を頂けると大変有難いのですが」

僕は反射的に腕時計に目をやった。でも本当は時計を見る必要なんて何もな**63**かったのだ。

「それほどお時間はとらせませんので」とあしかは僕の心を見すかしたように丁寧につけ加えた。

僕は何がなんだかよくわからないままにあしかを部屋に通し、グラスに冷えた麦茶を入れて出した。

「いや、どうぞお構いなく」とあしかは言った。「すぐに失礼致しますから」

それでもあしかは美味そうに麦茶を半分ばかり飲み、ポケットからハイライトをひっぱりだしてライターで火を点けた。「暑い日が続きますねえ」

「そうですね」

「でもまあ朝晩は幾分過ごしやすいようで」

「ええ、やはり九月ですから」

「でもなんですねえ、高校野球も終わっちゃったし、プロ野球も巨人の優勝は決まっちゃったようなもんだし、何かこうもうひとつ盛りあがりませぬねえ」

「うん、それはそうですね」

あしかはわけしり顔にふんふんと背いてから部屋をぐるりと見回した。「失礼ですが、ずっとお一人ですか」

「いや、家内がしばらく旅行に出ているもんですから」

**64** 「ほうほう、御夫婦でべつべつに休暇と、それはなかなかよろしいですね」

あしかはそう言ってクツクツと楽しそうに笑った。

要するに、全ては僕の責任なのだ。たとえどんなに酔っ払っていても、新宿のバーで隣りに座ったあしかに名刺なんて渡すべきではなかったのだ。誰だってそんなことは知ってる。だから誰も——気の利いた人間なら——あしかに名刺を渡したりはしない。

誤解されるところでも困るのだけれど、僕は決してあしかという動物を嫌っているわけではない。それどころかあしかにはなにかしら憎めないところがある、とさえ考えている。もちろん僕に妹がいて、ある日突然あしかと結婚するなんて言い出したらそれは少し面喰いするだろうけれど、かといって猛烈に反対するといふほどでもない。まあ愛しあっているんならいいじゃないか、結局はそういうことになると思う。その程度のものだ。

しかしあしかの手に渡った名刺となると、これはまた別問題である。御存じのように、あしかという動物は広大な象徴性の海の中に生きている。AはBの象徴であり、BはCの象徴であり、Cは総体としてのAとBの象徴である、といった具合だ。あしかのコミュニケーションはこのような象徴性のピラミッド、あ**65**るいはカオスの上に成立している。そしてその頂点、あるいは中心に位置するのが名刺なのである。

だからあしかの鞆の中にはいつもぶ厚い名刺ホルダーが入っていて、その厚さがあしかのコミュニケーションの中の地位を象徴するのである。ある種の鳥がビーズ玉を収集するのと同じことだ。

「私の友人が先日御名刺を頂きましたそうで」とあしかは言った。

「うん、あ、そうですね」と僕はとぼけた。「ずいぶん酔ってたからよく覚えてないんですよ」

「でも本人はとても喜んでおりましたですよ」

僕は適当にごまかして麦茶を飲んだ。

「で、まあ、このように突然おうかがい致しましてお願いとこのも誠に心苦しいのですが、これも名刺のとりもつなにかの縁ということで……」

「お願い？」

「ええ、たいしたことじゃないんです。まあいわばあしかという存在に対する先生の象徴的御援助を頂ければ、という程度のことなんです」

あしかという動物は相手のことをたいてい先生と呼ぶ。

**66** 「象徴的援助？」

「申し遅れました」と言ってあしかは鞆の中から「そこそと名刺を取り出し、僕に差し出した。

「こういうものでございます」

「あしか祭り実行委員長」と僕は肩書きを読みあげた。

「あしか祭りについてはお聞きおよびかとも思うのですが……」

「ええ、それはまあ」と僕は言った。「話だけはかねがね」

「あしか祭りはあしかにとつては極めて重大な、ある意味では象徴的なイベントなのです。いや、あしかのみならず世界にとつてと言い換えてもよろしいでしょう」

「はあ」

「つまり、あしかという存在は今日にあっては極めて微少な存在であると思われております。しかし——あしかです」あしかはそこで効果的に言葉を切って灰皿の中

でくすぶっているハイライトをぎゅっともみ消した。

「しかしあしかは世界を構成する精神性のある種のフアクターを確実に担っているのです」

「いや、そのお話は……」

「我々の目指しているのはあしかルネサンスです。それはあしかにとつてのルネサンスであると同時に、世界にとつてもルネサンスであらねばならぬのです。だからこそ我々は、これまでは極度に閉鎖的でありましたあしか祭りを根本的に変革し、世界に向けてのメッセージ、あるいはそのステップボードとしてのあしか祭りにしたのです」

「お話はよくわかりました」と僕は言った。「それで具体的に……」

「祭りというものはあくまで祭りにすぎません。華やかではありますが、それはいわば連続した行為のひとつの帰結でしかないのです。真の意味は、つまり我々のアイデンティティーとしてのあしか性を確認する作業はこの行為の連続性の中にこそあるのです。祭りとはあくまでその追認行為にすぎないわけです」

「ツインニコウイ？」

「壮大なデジャ・ヴュです」

僕はなんだかよくわからないまま肯いた。典型的なあしかレトリックだ。あしかはいつもこういったしやべり方をする。とにかくあしかにはしやべりたいだけしやべらせるに限る。べつに連中に悪気があるというわけではなく、ただしやべりたいというだけのことなのだ。

結局あしかがしやべり終わつたのは二時半を少し過ぎた頃で、僕はもうぐったりと疲れ果てていた。⊗

「ということですが」と言つてあしかは平然となまぬるくなつてしまつた麦茶を飲み干した。

「大体のところはおわかり頂けましたでしょうか？」

「要するに寄附ですね」

「精神的御援助です」とあしかは訂正した。

僕は財布から千円札を二枚出してあしかの前に置いた。

「少なくて悪いけれど、今これしかないんです。朝から保険料と新聞料金払っちゃつたから」

「いえいえ」とあしかは顔の前で手を振つた。

「本当にお気持だけいいんです」

あしかが帰つたあとには「あしか会報」という薄い機関誌とあしかワッペンが残されていた。ワッペンにはあしかの絵と「メタファーとしてのあしか」という文句が印刷されていた。僕はそのワッペンの処置に困つて、ちようど近所に違反駐車していた赤いセリカのフロント・ガラスのまんまに貼りつけておいた。すごく強力なワッペンだったから、はがすのに苦労したんじゃないかと思ふ。



